

# IMF サーベイ

国際金融安定性報告書

## 経済成長と金融の安定は トレードオフの関係にあるか

IMF サーベイ・オンライン  
2012年9月25日



銀行などの金融機関も自らのビジネスのあり方を変え始めている。

(写真:Tetra Images/Corbis)

- 金融システムの構造が経済の成長と安定にどう関係するかを概観する
- どのような状況にも最適な金融システム構造のモデルはない
- 優れた経営と規制監督のもとで、財務状況に余裕のある銀行システムが良い経済パフォーマンスをもたらす

政策当局は金融システムの安定化に向けた努力を続けているが、国際通貨基金（IMF）では、より安全な金融システム構造が経済のパフォーマンスをも改善するかを分析する研究を行った。

国際金融危機を受けて世界の政策当局は危機への対応手段を整備してきたが、これにより金融システムの構造が変わり始めている。銀行などの金融機関も自らのビジネスのあり方を変え始めている。

IMFによる新たな研究は、こうした変化と各国の金融システムの安定や経済成長との関係を分析している。研究成果は暫定的なものではあるが、金融システムの構造と経済のパフォーマンスとの関係に、国際金融危機をはじめとしたいくつかの要素がどう関わっているかを多少なりとも明らかにしている。

### 金融構造には様々なモデルがある

IMFの国際金融安定性報告書では一章をこの問題に充てているが、どのような状況でも最適であるような金融構造はない、と結論している。中国にとってよい仕組みがドイツにとっても良いとは限らず、日本でうまくいく仕組みが米国でうまくいくとは限らない。

IMFの金融資本市場局で国際金融安定分析の主査を務めるローラ・コドレスは、この研究を公表したワシントンでの記者会見で次のように述べた。「我々の分析で

も、質の高い監督規制の確立が金融システムの改革でもっとも優先されるべきである、との危機からの教訓が再確認された。」

IMFの今回の研究は1988年から2010年にわたる58の経済のデータを分析したものである。

IMFの研究では、金融システムの構造上の特徴——例えば財務状況や銀行による非伝統的金融仲介手段の利用と銀行以外の金融機関による金融仲介の状況、及び銀行同士が国内的・国際的にどれだけ密接に結びついているかに焦点を当てている。

### 過ぎたるはなお及ばざるがごとし

この研究では、銀行部門の自己資本比率が高いほど総じて経済のパフォーマンスが良いとの結論が見いだされた。多くの新興市場国は危機前にも銀行が高い自己資本比率を有しており、この結果先進国に比べ金融の混乱に対してはるかによく対応できた。

しかしながら、自己資本は多ければ多い程良いというものではなく、自己資本比率は高くなりすぎると経済成長にマイナスに働きはじめるようである。

安全度が高すぎるシステムでは貸出しに向ける資金が制約され、成長を阻害する恐れがある」、とコドレスは指摘する。

また、外国銀行を通じた海外市場との結びつきはたいていの場合プラスに働くが、危機時には不安定化要因になりうる。各国の銀行間の金融的なつながりの結果、米国に端を発する問題が急速に世界中に広まるということが起こった。各国間の結びつきがリスクの分散に働かず、危機伝播の経路になってしまったのである。

2008年に米国の投資銀行のリーマンブラザーズの破綻を機に世界中に危機が広まったような事態の再発を防ぎ、より安全な金融システムを構築するための努力が進められている。そのための新たな政策や規制を導入する上で今般の研究は新たな知見を提供するものとIMFは期待している。

### 熱すぎず冷たすぎず、ちょうど良くするには

IMFは状況の変化に対応するために、よりすぐれた規制とより立ち入った監督が必要であると主張している。

IMFは経済のパフォーマンスの向上のために、次のような規制改革と金融面での政策を提言している。

- 銀行に十分で良質な自己資本の保有と高水準の流動資産の維持を求めること。ただし、経済成長を支える銀行の貸出し機能を阻害するような過剰な規制は避けなければならない。
- 外国銀行の適切な経営と監督を担保し、健全な対外金融活動を維持すること。
- 対外貸出しを行なう銀行の破綻に対応出来る強力な仕組みを用意し、各国間の資金の流れを安定化させること。

なお、本研究に関連した別の研究も同日に公表されており、その中で **IMF** はより安全な国際金融システムの構築に向けての進展は見られるものの、重要な未解決の課題が残っていると指摘している。